

2015年12月18日(金)19:00~20:30

10-BOX キラキラ劇場 シンポジウム『卸町のこれまでとこれから』

《パネリスト》

- ・佐々木大/竹川隆司 (INTILAQ 東北イノベーションセンター)
- ・竹野博思 (ユニグラフィック/青葉画荘)
- ・澤野正樹 (ARCT)
- ・丹野久美子 (劇団 I. Q150)
- ・MC : 八巻寿文 (せんだい演劇工房 10-BOX 二代目工房長)

.....

【八巻】

皆様、こんばんは。

地下鉄が12月6日に開通して、10-BOXでは今日から3日間、『10-BOX キラキラ劇場』を開催しており、本日が初日です。

これより「卸町のこれまでとこれから」というタイトルでシンポジウムを開催します。10-BOX 二代目工房長の八巻と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

登壇者の皆様のご紹介をいたします。

向かって右側から、INTILAQ(インティラック)の佐々木大さん。竹川隆司さん。

それからユニグラフィック・青葉画荘の竹野博思さん。そしてアルクト(ARCT)の澤野正樹さん。劇団 I. Q150 の丹野久美子さんです。

まずは、卸町の背景と10-BOXについて、私の方からお話をして、それから、一番気になるINTILAQの事をじっくり聞かせて頂いて、後は竹野さんや、澤野さん、丹野さんの活動についてお話し頂ければと思います。

卸町は、今から50年前、ここは田んぼでした。

仙台の卸業の社長さんたちが、まだ見ぬ卸町の地に立って、風景を見ている写真が残っていて、その写真を見ると非常に感動します。また、卸町のあゆみをまとめて年表にしたものがありますが、日本全体が「高度経済成長に向かうぞ」という時代に卸町団地を作ったということが良くわかります。卸町とは卸商センターという協同組合が管理している地区なのです。皆さんのお手元にお配りしている資料の中に地図があります。この地図は、卸町＝協同組合仙台卸商センターの団地であることを示しています。

ちょうど50年前に、この卸町の歴史がスタートして、経済の成長とともに発展してきました。その頃は、中学校や高校を卒業してすぐ就職をする人たちは、金の卵なんて言

われた時代でしたが、「勤労青少年ホーム」という中学校高校を卒業してすぐ働く若者のための集いの場でした。

その後、大学の進学率が90%を超えるようになると、働く若者のための施設というのは、時代に合わなくなったということと、建物もだいぶ老朽化したこともあって、再利用するという話があった時に、仙台は演劇が盛んで、劇団もたくさんあったので、劇団が連名で仙台市に「稽古場が欲しい」と要望書を提出したのです。その後、市と話し合いを重ねてこの10-BOXが演劇の稽古場施設になったというわけです。同時に知的障がい者の通所の施設の方々も手を挙げたので、同居しましょうということで「のぞみ苑」が入り、一緒に日々ここで活動することになりました。

10-BOXが出来たのが2002年。この時、10-BOXが40年くらいの歴史ある卸町の社長さんたちに囲まれて、演劇というものが、どのように映るのか、とっても不安でした。演劇のイメージは年代によっていろいろだと思いますが、就職しないで遊んでばかりいる河原乞食みたいに思われるのではないかと、信頼関係が築けるだろうかというのは、とても不安でした。上空からパラシュートで膝が震えながら降りてくるような気分でした。でも、非常に暖かく迎えて頂きました。

卸町には、倉庫がたくさんありカッコイイなと思っていて、ここでダンスやパフォーマンスをやりたいとずっと言ってきました。でも、いくら倉庫を褒めても、喜んでくれないのです。暫くして気づいたのですが、商品がない空っぽの倉庫を、いくら褒められても嬉しくないという事が分かってきました。でも、よくよく調べてみると、協同組合仙台卸商センターは、運営内容・組合員数・規模では全国トップクラスで、ゴーストタウンでもないし、時代と共に、多少倉庫の物量の変化はあるかもしれないけども、背中を丸めて一生懸命働いている卸町の人を見ていると、だんだんそういうことも見えてきました。

その後、紙屋さんの倉庫が空いたので、そこを組合が買い上げて、イベント倉庫として提供してもらうようになりました。今はその一部を能舞台として整備し、「能-BOX」として活用させていただいています。

2002年に10-BOXが出来てから、卸町が変わります。

2003年に阿部仁史さんという世界的に有名な建築家が、卸町の倉庫をアトリエにして、そこでハウスレクチャーという勉強会を始めました。ここは人が住めない行政地区ですけども、それを逆手にとって、暗くて広い駐車場で映画の上映をやろうという事になり、「おろシネマ」が始まりました。それから卸町の公園で、「Theater Group “OCT/PASS”」が演劇のテント公演をやりました。

卸商センターは、会館の地下が食堂街だったところ、バンドの練習施設「音楽工房MOX」として2004年に改修しました。練習室が4つしかないのですが、広々としてクオリテ

イーの高い完全遮音の音楽工房なので、どんどん利用者が増えて、開業一年でほとんど元を取ったそうです。

それから、倉庫でいろんなイベントをやりましたが、近くの東宮城野小学校の子ども達が「会社を訪問しよう」という話になり、子どもたちが社長さんにいろんな質問をします。社長さんがそれに答えるわけです。「社長さんは何が面白くてこの仕事をやっているのですか？」などいろんな素朴な事を聞くのに、子ども達が驚いた「へ〜！」の回数を競うというのをやったのです。文化を扱う 10-BOX は絶対負けちゃいけないのですけれども、いつも負けます。鳴海屋紙店とか計測器さんとかに負けちゃいます。そのイベントは、未だにやっています。東宮城野小学校の4年生が班に分かれて、会社見学に行き、社長さんから話を聞いて、子ども達が社長さんたちに見学したことを発表してくれるのです。

2005 年になると、イベント倉庫の前に黒い謎の建物が現れました。「トイレがないと不便でしょう」ということで、阿部仁史アトリエの矢口さんの設計で、卸商センターさんに綺麗なトイレを作ってもらいました。と、いう風に、どんどん卸町が変わっていきます。

2009 年に卸町のサンフェスタという大きな展示場で、フルオケのクラシックコンサートを開催しました。また卸町は道路が広く、夜は人がいないので、映画のロケーションにバッチリなのです。

映画の撮影で、「ゴールデンスランバー」とかがきました。そして「ゴールデンスランバー」を夏の「おろシネマ」で上映したのですが、野外の駐車場で映画見ながら、映っている風景がまさに（今いる）この風景だったというような事もありました。

それから「シェイクスピアカンパニー」が、「夏の夜の夢」の演劇公演を倉庫で実施しました。

卸町会館の一番上の階にビジネスホテルがあったのですが、ホテルがなくなる事になったので、卸商センターは、ホテルを改修して、各お部屋をクリエイターが使えるオフィスに変えて、クリエイターがシェアする「TRUNK」(TRUNK | CREATIV OFFICE SHARING) という拠点施設を作りました。

ただ、実際に 10-BOX で演劇をやっている人たちが TRUNK に行った事ないとか、卸町の中にいろんなものがあるのに、お互いなかなか出会えていないということがあるので、今日は皆さんが会おうキッカケになればいいなと思っています。

あと、「文化庁長官表彰文化芸術創造都市部門」を、東北で初めて仙台市がとりました。仙台市の受賞の理由が4つあって、1つは、市民による企画運営など市民力を活かした文化イベントという理由で「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」や「せんくら」、あとは市民が自由に創造性を発揮する新しいコンセプトの施設整備で「せんだいメディ

アテーク」、それから市民の意見に基づく施設整備運営で「10-BOX」。あとは、地域特性と文化芸術を組み合わせた特色ある街づくり「卸町地区」という4つの理由の半分が卸町および10-BOXで表彰されました。

元々田んぼだったので、地盤は少し緩い事もありますが、だいぶ前に地震があった時も、大雨が降って冠水した時も、卸町はテレビ映像に映ってしまいましたが、それでもタフに街づくりをしてきました。そして今回、ついに待望の地下鉄が通ったので、これからますます楽しみです。

INTILAQの佐々木さんと竹川さんが今回いらっしゃっていますが、INTILAQの場所は、この地図の真ん中の少し左側に★がついている場所ですね。

でも、INTILAQはTRUNKにも入っていらっしゃいますよね？

【佐々木氏】

まさに今日が竣工でしたので、それまでは準備室としてTRUNKに入っておりました。

【八巻】

はい、この地図に落とし込んであるINTILAQとTRUNK、竹野さんはユニグラフィックと青葉画荘、澤野さんはARCTとして10-BOXの中の一室を事務所にして活動しています。IQ150のスタジオは、地下鉄の近く、日産の向い側の倉庫の2階がスタジオです。

今日、初めて出会う中で、なるべくお互いの自己紹介に時間をかけたいと思います。その後、どんな相乗効果が生まれるのか、卸町で何が出来るのかなどのお話が出来たらいいと思っています。では、早速、謎に包まれたINTILAQの紹介をお願いいたします。

【佐々木氏】

ご紹介に預かりました、INTILAQプロジェクトです。プロジェクト名がINTILAQで、所属しているところは、IMPACT Foundation Japanという団体です。その佐々木と竹川です。よろしく願いいたします。

先ほどから話がございましたが、とにかく謎のベールに包まれているという事を、八巻さんだけではなく、会う人会う人からお話しを受けております。

INTILAQというのは、何の略かと言いますと、実は「スタートする」「立ち上げる」という意味のアラビア語で、カタールから名づけられた名前です。その辺の背景からお話ししたいと思います。

カタールフレンド基金という、カタールからの支援を受けて、我々はこのプロジェクト

を運営しております。カタールフレンド基金というのは、まさに震災後からですが、日本のために役立ててくださいということで、カタールから約 100 億円の基金が設立されました。

このプロジェクトは4つの分野に分かれていて、起業家支援、子どもたちの教育、ヘルスケア、水産業で、既にいくつかのプロジェクトが走っています。有名なところでいうと、女川町にある「マスカー」と呼ばれる大きい冷凍/冷蔵施設がありますが、あれもカタールフレンド基金で建てられた建物です。仙台の中では、AERの中に入っている「エリム」と呼ばれる、子ども向けの職業体験施設、それから東北大学の「カタールサイエンスキャンパス」というのもカタールフレンド基金によるプロジェクトです。

それぞれ、みんな名前が付けられました。INTILAQ とは「立ち上げる」という意味で、まさに起業家支援にピッタリの名前が付けられましたし、「マスカー」なども、アラビア語で魚を獲る漁法の呼び名らしいです。あとは、「エリム」はアラビア語で教育という意味とのことです。それぞれいくつかのプロジェクトがありますが、実は起業家支援は我々だけです。

結局、震災復興のために、水産業や教育などありますが、永続的に復興させていくためには、起業家をたくさん育てていく事が大切だということで、我々に与えられた使命は、卸町の施設を通じてそれを実現させていくことで、それがめでたく本日竣工となりました。ただ建物は完成しましたが、これから、いろいろ準備を進めて、1月の下旬くらいに皆さんをお招きできる予定でございます。

場所は、先ほどご説明あった通り、まさにサンフェスタの裏のところですよ。どんな風な建物かと言いますと、2階建てです。チラシも今日入っているかと思いますが、その中に地図やイメージ図があります。

1階は広いオープンスペースがあります。

(写真を見せながら説明)

これが外観です。

建物のロゴがカタールフレンド基金のロゴです。この赤い丸が日本の丸で、横にあるものが、カタールの砂漠から山を見た時のラインがモチーフになっており、まさに日本とカタールの融合がイメージ化されています。

正面玄関から中に入ると、コワーキングスペースがあります。ここにたくさん家具が入って、フリーアドレスでどこでも自由に座れるような会員制の作業スペースとして開放する予定です。

ビデオ会議をやる様なテレカンファレンスルームや、宿泊施設があります。企業単位や会社単位で、グループの研修施設として利用されたい方のために、そのまま泊りがけも出来る機能も取り揃えています。というのは、県外の方にもどんどん利用して頂けるようヒアリングした際に、宿泊機能が欲しいという意見がありました。寝る間際まで、今

日の話し合いが出来るようなスペースがあると凄く良いというお話もあり、カプセルホテルのような簡易な形ですけども、こういった宿泊機能もあります。

ただ、ふらっと来た方が、今日一晩泊めてくださいといった目的ではないので、そういった旅館ホテル機能ということではないです。

あと、こちらが階段教室という一番広いメインホールです。

真ん中にあるのが階段で、欧米とかではよくありますが、そのまま階段に座って、セミナーや講義を受ける事が出来るようなスペースです。またここにプロジェクターで映画館みたいに大きな画像を映し出すことが可能です。

詰めて入れば、100人ぐらい、余裕をもって考えると大体60人ぐらい座れると思います。2階建ての吹き抜けで、2階の通路からも見下ろせる形になっています。このメインホールを取り囲むように、部屋がいろいろあります。こちらは階段教室を下から見た感じですが、階段教室の階段は、段差が少し大きく、座ってゆっくり座れるスペースになっています。欧米では土足で階段に座るものですが、やはり日本の方は気にされるので、こちらは土足禁止で運用していく予定です。

これは向かい側の駐車場から撮った写真です。芝生があって、ライトもついているので、夜はロゴを照らしたりすることを考えています。また、屋上には太陽光パネルの設置を予定しています。自家発電した電気を自己利用するのではなく東北電力さんへの売電を予定しています。いざ停電になった時には、是非、周りの方々にご利用頂けるようなればいいと思っています。ただ夜は出来ませんね・・・。

そういった形で地域の方にも貢献していければと思っています。

あと、キッチンがあります。厨房設備として本格的な感じですが、ここで何かを作ってレストランの様に提供するというのではなく、我々は起業家を育成していくことが主旨ですので、飲食業で起業したいという方々が、ここで試作品を作ったり、料理教室としてご利用頂けるような設備として用意しております。

家具がまだ入っていないので殺風景ですけども、教室、クラスルームもあります。

ここは、結構広いスペースになります。真ん中に可動式の壁がありますので、それで2つに区切って、約30人入れるスペースが2つ出来ますし、取り払えば、60人ぐらい入れるスペースになります。

また、放送スタジオもあります。我々はこの研修センターを、イノベーションが起こるようなスペースにしたいと考えています。

3Dプリンターやレーザーカッターなどのファブラボ用の機材も用意する予定です。我々が描く理想像は、様々な分野の方々の出会いがあり、新しいアイデアが生み出され、そのアイデアを3Dプリンターなどで形にし、さらにはインターネット放送局のような形で世界に発信できるようになればよいと考えています。

こちらは、カタール様式の部屋ですが、ここに家具を入れていく予定です。折角カター

ルから支援を受けた施設なので、少し皆さんにもカタールの雰囲気味わって頂こうということで、ここではミーティングを行うのも良いですし、皆様に寛いで頂くなどの目的でご活用していただければと思います。

これも上から見た図です。さっきの階段教室のところ。ここは広いスペースですので、結構迫力があるので、いろんなセミナーとかイベントでも使えると思います。この施設は先ほどもお話しましたが、ただ見に来て頂くだけでしたら、一般の方でも大丈夫ですが、作業スペースなどは、会員制にして、フリーアドレスでどこでも座れるようなスペースや、固定席を使いたいという方のブース席を用意しています。会議室も時間で提供を考えていますが、もしご希望があればテナントの形でオフィス利用したいという方に、ご提供できるような事も考えています。

ですので、皆さんの周りでも、会員になって使ってみたい、固定席を使ってみたい、オフィスとして興味がある方などいらっしゃいましたら、ぜひご紹介下さい。

あとはイベント利用としてホールを使ってみたいとか、スタジオを使用してみたいなども、是非ご興味がございましたら教えてください。

1月の最終週辺りに、初めてここを使用したイベントをやり、そこからお客さんをお通しするような方向で考えております。ご案内はいずれ発信いたしますが、是非、皆さんのご利用、またお越しをお待ちしております。ということで、竹川さんから何か補足をお願いします。

【竹川氏】

ここにたどり着くには、実は2年くらいかかっております。

2013年にカタールフレンド基金を頂く事になってから、いろいろとこちらとの調整等に時間がかかってやってきました。カタールからしても念願の建物ということになります。これから世界に出ていく仲間たちがたくさんでてくれば良いと思っております。是非みなさんご利用頂ければと思います。本日は貴重な機会をありがとうございました。

【八巻】

ありがとうございます。パネラーの皆さんから質問等ございましたらどうぞ。

【竹野氏】

日の丸の赤とカタールの丘はアルファベットの「Q」を意味しているのですよね？

【佐々木氏】

はい、カタールの「Q」がモチーフになっています。

そしてこのロゴの使用については厳しい利用規定が定められています。

【八巻】

基本的には、会員制ですよね？

【佐々木氏】

はい、スペースを利用するのは会員制を考えておりますが、一般の方でも来て頂いて見学は出来ます。

【丹野氏】

一般の方は見学だけでしょうか？借りたいなどの要望はどうなりますか？

施設の会員はどういった事で決まるのでしょうか？

「何が出来るか」を提案し了承された方たちが会員という事になるのでしょうか？

【佐々木氏】

コワーキングスペースという考え方ですので、個人で起業された方や企業を考えている方が作業スペースとして利用する考えで、先ほどもお話ししましたように、どこに座ってもいい作業スペースのフリーアドレスや、固定席、またはオフィスとしてのお貸出しなどの提供を考えています。会員の方は、そこを仕事場として会議スペースとして利用できます。

【竹川氏】

少し誤解を招かない様に申し上げますと、会員制なのは働くスペースだけです。階段の教室や会議室などは一般の方にも開放しています。勿論、会員価格というのもございますが、基本的にはどなたでもご利用頂けます。あとは、我々の主催であったり、仙台市、卸町と一緒にあったり、いろんなイベントをここでやっていく予定でございます。基本的には一般公開のイベントになります。

【佐々木氏】

利用の料金は、今まだ検討段階で、近々正式な料金は公開予定です。

大体、個人会員で働くスペースを利用するのは、約1万円程度を考えています。出来るだけリーズナブルな価格で考えております。その他の施設の予定価格は、会議室は1時間数千円程度、階段教室は100名程度収容できるので、1時間1万円以上の規模を検討しております。また宿泊については、まずは研修やワークショップの利用を優先させて、利用は後々の話で考えております。

【丹野氏】

基金で作られたので、無料かと思っていました。そうはいかないのですね？

【佐々木氏】

基金は出して頂くのですが、建設やプログラム制作の費用なども掛かっていますし、こちらの基金は永続的に支援を受け続けていくというわけではないのです。支援の期間がありますので、期間終了後は、私たちが自立して継続していかなければなりませんので、利用者より費用を頂戴するようになります。

敷地面積は1千平米ぐらいです。

駐車場は5台のスペースがあります。卸町のエリアというのは、車で来る方が圧倒的に多いとは思いますが、今回、卸町の駅が出来るということもあり、今後は電車で来られる方も多くなるだろうということで、駐車場の数はそこまで多くはございません。

【竹野氏】

場所の提供だけではなく、起業家へのコンサルティングやサポート、中央に攻めたい、関東に攻めたい時の繋ぎなどのような支援もお考えですか？

【佐々木氏】

そういったプログラムも私たちの方で作っていかうと思っております。今は建物を完成させることに注力していたというのが正直なところですが、イベントや起業家を目指す方のためのセミナーやワークショップもそうですけど、起業家のためのカウンセリングや支援というの、どんどん充実させていきたいと思っております。

【竹川氏】

起業家の方がどんどん入って頂ける前提のもと、具体的に考えているところとしましては、例えば、弁護士、会計士、行政書士に入ってもらって、1か月に2回程度、無料での相談タイムの実施をすることや、他のコワーキングのスペースとも連携して、会員の方は、他のスペースも月何回かは利用できますなど、別の場所で商売したい時のための、そういった紹介もさせて頂きたいなと思っております。

【澤野氏】

建物をみると、ここでどんな舞台ができるかなと考えてしましますが、僕が関わる ARCT の事を思った時に、企業というとビジネスという事だと思うのですが、例えば、ノンプロフィットな活動であっても、相談しに行ってもいいのでしょうか？

【佐々木氏】

はい、勿論、大丈夫です。というのは、我々、今回起業家支援といった話をしていますが、英語で言うと「アントレプレナーシップ」と言います。起業家精神というと、皆さんすぐに会社を立ち上げるといった事に直結しがちですが、「アントレプレナーシップ」とは、「新しい事にチャレンジする」という気持ちそのものですので、何か新しいことをしたい、一歩踏み出したいという方を支援できるような施設として機能していければいいと思っております。さらに言えば、そういった気持ちというのは、子どもの頃から育んでいきたいと思っておりますので、そういった方々にも貢献できるような取り組みが出来ればと思っております。

【竹川氏】

お配りしているパンフレットの中にも、我々「おこすひと」という言葉を使っています。ですので、必ずしも、ビジネスの（起業の）起こす人だけではなく、新しいチャレンジをしていく人は誰でも応援していきますというスタンスでやってまいります。恐らく1月29日頃にオープニングを実施しますが、その時にも、ビジネスの方と社会起業家と両方のセッションを準備しております。

【澤野氏】

私のまわりは、私も含めてアーティストが多いので、敷居をまたげない場所かと思ったのですが、ふらりとご相談しにいつでもいいのですね！ありがとうございます。

【八巻】

ありがとうございました。それでは、竹野さんのご紹介に移らせて頂きます。竹野さんはユニグラフィックの方で、卸町の組合の活動もされています。「おろシネマ」の上映作品の選定からトークショー企画、また、チラシの制作などもされています。現代美術の展覧会を、ハトの家や能-BOXで実施をしています。竹野さん一人で、現代美術のイベントを震災前から、勿論震災後もやられています。とても夢を持っていらっしゃるって、行動力もあります。一番最近のものでは、「わらアート」です。地下鉄開通により荒井駅と卸町駅のところに、わらでマンモスなどを作られました。それでは、竹野さんよろしくお願ひします。

【竹野氏】

皆様の資料にユニグラフィック（青葉画荘）とございますが、ユニグラフィックはデザイン会社で、企画・制作・デザイン・WEB・出版・撮影となんでもやっております。その販売部門で、画材屋として青葉画荘があります。卸町に本店がありまして、一番町の青葉通支店も営業しております。今ご紹介頂いたように、私はアートイベントをやっ

ていますが、仕事はデザインの仕事です。デザインとアートは似ていますが、水と油くらいに異なります。デザインというのは 99%が商業デザインで、ある商品や物があって、それに線や色、フォルムを与えていくことがデザインの仕事です。アートというのはファインアートですので極端な話、目的が無くても成立するのです。それが似ているけど全く違う性質のものである、という話からいつも始めさせて頂いております。デザイナーにしてアーティストという言葉をよく聞きますが、両立している方はそんなにはいないと考えます。身近な例で言いますと横尾忠則さんや、江戸時代の本阿弥光悦くらいですか。海外で有名なのはアルフォンス・ミュシャくらいだと思います。

アーティストはよくデザインを手がけます。岡本太郎もダリもやりました。ただ、それはデザインを「した」というだけであって、職業としてのデザイナーではない。2年前に横尾忠則さんとお話しさせて頂いた時に、その違いを聞いたのですが、彼は簡単に答えました。デザインはお仕事です。アートは命を懸けてやる遊びです。このくらい違うのです。私はデザインでご飯を食べていますが、では、アートは何かというと 100%ボランティアです。私がそれで食べていると思っている仙台のアーティストがたくさんいるのですが、食べるどころか出費が増える一方で何も入ってこない（笑）。ただ、仙台を面白くしたいな、という思いで続けております。

私は、高校までが仙台で、東京に出て大学卒業後に就職したのですが、30 歳を過ぎて仙台に戻り、その後、ユニグラフィックに入社しました。

実はユニグラフィックも青葉画荘も卸町に越して来たのが、2007~8 年ごろなのです。既に 10-BOX があり、MOX があり「おろシネマ」があり「ドリームコンサート」をやっていて、卸町は仙台でも屈指の芸術文化発信拠点であるということをも耳にはしておりました。ところが、肝心の美術がないのです。そこで、青葉画荘にはギャラリーもあるので、私たちが美術を活用して、何かやろうかという趣旨がそもそもの発端です。一番町から引っ越してきて本社を建て、青葉画荘をあそこに借りたのですが、2008 年の秋のふれあい市の時に、閉鎖された卸町会館の裏通りでライブペインティングをやろうということを企画し、青葉画荘から 100 号のキャンバスを 3 枚持ってきて道路に並べ、自由に描いてもらうという試みを行ったのが最初です。それが結構、評判が良かったので、次回は「卸町アートファスタ」みたいなものをやろうかということになり、2009 年 4 月に開催しました。その場所が、今は TRUNK になっていますけど、旧ビジネスホテルの跡地です。各部屋をギャラリーにして、作家に自由に作品を販売してもらうということがそもそもです。

仙台に純粋な美大がないのが大きな理由かと思うのですが、東北唯一の政令指定都市が東北一の美術後進都市だと思っています。楽都はありますが、私は、美の都と書いて、「アート仙台」というものにしたいと思っています。そこで、卸町でのアートプロジェクトを立ち上げるためにテーマを掲げました。それが「仙台 SOHO プロジェクト」です。2009 年に仙台市の観光交流課の認証を得ましたが、倉庫があつて、音楽も演劇も映画

もやっている、じゃあ私たちもアートを用い、ここを総合的なアート拠点にできないかと考えました。プロジェクトのテーマは、もっと作品を売ろう、作家同士も交流しよう、ということです。これまではそういう場所が少なかったのです。お手本としたのが、ビックサイトで開催される「デザインフェスタ」です。ブースを用意して、作家はそこで作品をどんどん販売する。作家というのは作品を売って生きていくのが本当なのですが、なかなか難しいので、兼業作家として活動しています。私は「アートによる経済性」ということを常々言っていて、それを確立するようなものを作っていきたいと。仙台には純然たる美大がないものですから、そういうことをやっているところがないのですね。山形も一生懸命やっています。秋田も美術の短大ができましたし、青森は十和田や、蔵の美術館がありますし、世界的な芸術家が出ています。文学や演劇の世界では、太宰治や寺山修司が出ています。岩手は宮沢賢治がいて、舟越保武、舟越桂を育み、萬鉄五郎がいる。福島には福島県美（福島県美術館）があって、郡山にも市立美術館があります。仙台にはどこかあるかと思うと、県美（宮城県美術館）しかないのです。

そうすると、大学を出てアーティストを目指そうとする若い人たちが、作品を展示するためにギャラリーを借りようかとする、スクール展や卒業展ではなかなか会場を貸してもらえない。さらに作品を売ろうとするのであれば貸せない、そういったギャラリーが多かったのです（今は少し変わってきましたけど）。ギャラリーとしては、お店のクオリティー維持も必要ですので、例えば作家が1枚1万円でも売ればいいと思っても、ギャラリーは10万程度の値をつけて、売れば売上げの半分を取るという方法です。

私の試みは先ず、どのくらいの価格で売りたいのかを作家自身に決めてもらうことから始まります。売れなくても、お客さんと話をするだけでも作家は元気になるのです。それを実施したのが、第1回目のアートフェスタです。春のふれあい市にぶつけて2日間、開催したのですが、皆様ご存知のように、問屋市ですから、鍋釜安く買いに来る方たちが、アートになんて興味示さないだろうと思って蓋を開けてみたら、ある水彩画の作家は作品を5~6点持ち込んだのですが、7万円程度を売上げ、また、福島から来た作家は自分の絵葉書を一枚150円で販売したのですが、2,000円程度を売り上げて喜んでいました。これは金額ではないのです。自分の作品を見てくれ評価してくれた、ましてや買ってくれた、それが嬉しいのです。そういう場所を作ろうというイベントが第1回目のフェスティバルでした。

私たちの取り組みを街づくりの一環とお話くださることは、大変有難いのですが、私は「まちづくり」とは結果論である、と考えます。先ず、私たちが卸町でアートをやる必然性がなければいけない。だから私は、卸町から美術を卸そう、発信しようと思って、そうした必然性をこの場に持ち込むことにした。会社が卸町にあるので、私たちは企業住人として、一日平均12時間近くも卸町にいるわけです。そうすると、ここにこういう物が欲しい、足りない、ということが必然的に出てくるわけです。その必然性がある

からイベントに継続性が生まれてくるわけです。そして、その継続性があるから、人が集まり、そこに何らかの経済が生まれるわけです。必然性があるって、継続性があるって、経済が生まれる。これ等の結果が、私は「まちづくり」だと思っています。アートで街を興そうというのは、とんでもない話だと思っています、逆です。そこにアートが根付くことで、初めて街づくりなる、そういった活動を2009年から2013年まで5年間実施しました。2010年には美術家で、今売れっ子の会田誠という作家を1か月間仙台に呼んで、ワークショップを開催しました。その画像を少し映したいと思います。

(映像を投影しながら説明)

最初に映しますのが、「モニュメント・フォー・ナッシングⅡ」という会田誠がライフワークにしているイベントで、最初、彼が多摩美術大学の講師をやっていた時に、学生たちと段ボールを使ってバロック以前の、ロマネスク建築の大聖堂の壁面(ファザード)のようなものを段ボールで作ろうということをやっていたのです。多摩美で実施して、その後、名古屋芸術、京都造形でやって、仙台では東北生活文化大学の学生諸君に声がけし、東北初のイベントとして開催しました。会田誠という美術家は2013年11月～2014年3月に森美術館で「天才でごめんなさい」という50万人以上動員した展覧会を開催しました。彼は新潟出身ですが、9月12日～11月3日まで新潟県立近代美術館で、2か月近い展覧会を開催しました。その際も会って話しをしたのですが、これからお見せするのは今から5年前の映像です。ご覧ください。

(映像を投影しながら説明)

【竹野氏】

これを作ったのは東北生活文化大学の学生がメインでしたが、宮教大の学生さんや仙台西高美術部の学生さん達も参加してくれ、いろいろ作ってくれました。約1か月間かかりました。

こちらは生活文化大学の高校生が全学年バスで見学に来た時、一部作品を作った際のもので、メディアもたくさん来てくれました。各パーツを一つの面にして、一つの作品として壁に飾って見せたのは、この時が最初でした。この作品を秋のふれあい市の時に一般の方にお見せしました。これは9月から1か月間実施し、その年の秋の11月に「東京デザインウィーク」のイベントにも出展しました。そのシーンをお見せ致します。

この時は、経産省がクールジャパンを謳い、漫画や日本のアニメを発信した最初の年です。相当数のお客様が来場し、最終日には入場制限がかかるぐらいでした。

この男性は、高橋龍太郎先生でして、現代美術の日本人コレクターで恐らくNo.1の方です。先生のご親戚の方に南三陸の方がいるようで、私も何度かお話しをさせて頂いたのですが、必要な時には作品を貸してあげるとのことまでおっしゃって頂きました。

最終的に何が言いたいのかといいますと、最初に INTILAQ さんのお話を聞いて、とても面白い空間だなと思ったのですが、私たちは 2008 年に「アートゲリラ」というタイトルで 1 回目を開催した翌年に、その会場がなくなったのです。また 2010 年に会田誠さんをお呼んだ会場のイベント倉庫「キヨミズ」が、翌年には「能-BOX」になりました。震災の年に能-BOX で実施した記録が 3 枚目の「日本人のためのジャポニズム」で、この趣旨は皮肉の意味を込めて「和美差美(ワビサビ)」というものを開催しました。出来たばかりの能-BOX という空間を使って、能という日本の伝統芸能の中に、現代美術を置いたらどういう風に見えるか、そこで能を舞ったらどうなるかというのが、企画趣旨でした。この時に痛切に感じたことが、情報発信とは発信するだけではなくて、受信しないと生きてこないという現実です。仙台には美術の受信拠点がない。3.11 の後に、いろんなアーティストが何かしたいといっても、仙台にはその受け皿がないので、多くの話が私のところにきました。その時に札幌のアート団体、東京のアーティスト鴻池朋子さん、大阪から淀川テクニックが来てくれました。ベトナムからジュン・G・ハツシバが来てくれました。仙台の地を走り、その航跡を辿る方法を用いて作品を作り、横浜トリエンナーレや東京アートフェアにその時の作品を出展しました。そして終了後、作品を仙台に寄贈したいということになったのですが、仙台に受け皿がないのです。また、「若林 100 年ブランコ」といって、全壊した荒浜の防風林を材料にしたブランコ作品を作ったのですが、これも結局、仙台で受け継ぐ場所がなく、今大阪の建築系の社長さんのご自宅のガレージに眠っています。淀川テクニックさんの作品は、こういう椅子に淀川のゴミをいっぱい貼り付けたような作品でも、東京だと 30 万くらいで売れるわけです。その人たちが作った巨大な作品があるのに、どうして仙台で受け取ってくれないのだろうと、かなり悩んでしまいました。

つまり、場所がないのです。情報の受信拠点という場所がないのと、作品を展示する場所がないのです。私たちは無理を言って、ここの能-BOX をお借りして美術展をやりましたが、5 年実施したら、この卸町アートフェスタを止めようと思っていたのです。でも 3 年目に、考えてみたら仙台に美術館がないと思い、開催したのが第 4 回目の「仙台に現代美術館をつくろう」というイベントで、その黄色い表紙で、お多福を表紙に用いた「ART INDEX VOL. 4」がその時の情報紙になります。八巻さんをはじめ、仙台市の方々、市議会議員、大学教授、メディア関係を集めて、まずは勉強会を立ち上げて、こういうことはどうでしょうかね、という問題提起をさせていただきました。仙台は東北唯一のアート後進都市だといったのには理由があって、全国に政令都市は 20 か所ありますが、その 20 の都市で、市に準ずる美術館や関連施設がないのは、実は仙台だけです。奥山市長がミュージアムシティーといっているのに、凄く勿体ないと思う。今、ミュージアム連携ということではいろんなことをしているけど、拠点がないのです。例えば、もしここに美術館があれば、美術館をひとつのハブにして、地底の杜ミュージアムと、文学館と科学館等を繋げることが出来ます。交通インフラも、地下鉄の南北線と東西線とる一

ぶるバスを使用すれば整備されます。

そうはいつでも、なかなか話が進まないのですが、こうしたムーブメントは継続しなくてはいけないと思います。そのためには、有志や同志が集まって、声を上げ続けるしかない。その場所は現在、私にとっては卸町です。卸町の空いている倉庫等をリノベーションし、美術館ができないだろうかという試みです。是非、ご興味がある方がいたらご参加、お声掛けください。以上です。

【八巻】

ありがとうございました。

続いて、澤野正樹さんをご紹介します。

3. 11 の大震災があつて、10-BOX も小さな避難所になりました。

演劇関係者は、朝から晩まで、入れ代わり立ち代わり 10-BOX に来ては、仲間の安否をホワイトボードに書き上げていた中で、活動が自然発生的に生まれていきました。

ARCT の事や、澤野さん自身の演劇の活動についてもお話しして頂ければと思います。

【澤野氏】

私は ARCT の事務局長の澤野と申します。ARCT は八巻さんにご紹介頂いたとおり、震災直後から「アトリバイバルコネクション東北」という団体を活動を開始しまして、その活動を 2 年間で一度閉じて、その後、「アトリバイバルコネクション東北」の愛称である「ARCT」を正式名称として、新しく立ち上がった団体です。主に舞台芸術に関わる方、アーティストだけではなくて、新聞記者さんもいます。約 40 名の会員がいる団体です。そして、「アトリバイバルコネクション東北」から新しく「ARCT」が立ち上がってから 3 年目になりますが、まだ任意団体として活動していて、法人格を取得するのかもしれないのかも含めて、これから長く続く復興と、アートが街に入っていく動き、そういったところに、私たち一人一人がどういった事が出来るのかを考えながら、個人や、劇団単体では動けない動きが出来る場所が ARCT であると思い、会員と外の方と色々なことを話し合いながら、これからどうしていくか考えて行っている段階です。私もずっと演劇の畑だけにいたので、今このように多くの方と新しい繋がりが出来て、新しい価値観が入ってきています。ARCT の活動の事を少し説明させて下さい。

ARCT は「すべての人にアートを」というミッションを掲げて、現在 4 本柱を活動の軸として、ネットワーク体として活動しています。

一つがネットワーク事業、もう一つがパートナーシップ事業、そしてアウトリーチ事業、アーカイブ事業の 4 本柱を主軸にして活動しています。舞台芸術に関わる一人一人と意見を交わしながら、何かを構築していくということは、なかなか難しいことであると感じながら日々活動していますが、今回、キラキラ劇場で、私はプログラムコーディネーターとして参加させて頂いております。10-BOX の box-1 と box-2 で行われているプロ

グラムは、全員 ARCT の正会員のプログラムで、我々がこういった活動をしているということをお伝えする場としてやらせて頂いています。劇場にお客様が来て頂く事を、我々は「インリーチ」と呼んでいます。我々がどこかの施設に伺う「アウトリーチ」という活動に、舞台芸術に関わる我々の社会の中での場所が見つかるのではないかとこの可能性を感じたのも、震災以降の活動の中でした。震災以降から文化庁芸術家派遣事業の中で 200 件以上を実施させて頂き、ARCT も実行委員会のひとつですが、その中の半分以上のプログラムコーディネートをして頂きながら、アーティストとして現場に赴いて、毎年 1 万人くらいの子供達と触れあっている事を継続しています。今の ARCT の活動の中でも主軸になっているのが、この活動といっても過言ではないかと思えます。

今回のテーマが「卸町のこれまでとこれから」ということで、立ち上がってから年の浅い私たちのこれからのテーマです。私個人も仙台にきて 10 年になります。大学進学とともに仙台にきて、そこから舞台芸術の世界に入っていく、その時に、10-BOX の存在を知って、いろいろなご縁もあって、こういった場にもいさせて頂いております。卸町は、空間があるのですよね。特に舞台芸術に関わるアーティストにとっては、卸町という空間は、非常に魅力的な空間に見えます。かつ自分たちで何かを作る時に、舞台は無限の可能性があるとあって、その中で無限の可能性を押し広げる出会いや物がある場所でも卸町はあるのだと、改めて今回みなさんの活動されていることを聞きながら思いました。

僕も劇団で演出していて、本番が近くなると、週 5~6 日で稽古を毎週続けていくので、なかなか外の意見を取り入れるということがなくなってしまうのですが、卸町にいて、何かあった時に、話を聞きに行ける人たちがいるという感覚を持てること自体、とても恵まれた環境で、そういう意識でいられたら、創作というものも、また違う面が見えてくるのではないかと感じました。今、卸町の 10-BOX は 24 時間活動が出来る施設で、創作環境としては非常に素晴らしい場所で、もし今後、一般の方が住むことになったら、それもまた変わっていきそうな予感がします。そういう中で、我々の創作環境が豊かになる部分もあれば、また少し違った社会の立ち位置を見つけていかないとけない。それは創作環境もそうですし、舞台芸術の存在の在り方そのものかと思えます。我々は震災後にアウトリーチの中で、社会の立ち位置を感じて、そこを信じて活動しています。そこに、これからも思いを委ねつつ、創作活動を続けていきます。ARCT の活動と私個人が思うことお話しさせて頂きました。

【八巻】

ありがとうございます。

まさに今日のシンポジウムは、出会いからはじまるということが狙いでした。

INTILAQ さんは本日竣工して、竹野さんは 5 回も美術展をやってきました。

丹野さんどうですか？

【丹野氏】

皆さんのお話を伺っていて、今日初めてお会いした方が多くて、私たちも考えてみたら、2007年に10-BOXの近くに稽古場を探して、倉庫をお借りして、現在に至ります。私たちが稽古場を探していた時に、「ハトの家」と言われているところを見ていたのです。何度も交渉したのですが、個人には貸せないと言われたのですが、漏れてくる光の感じとか凄く綺麗な場所で、閉塞感のないところがいいと狙っていました。さっきのお話の能-BOXになる前の場所で、段ボールアートがあんなに面白く息づいたりもするし、多分、生身の人間が何かをやっても面白い場所で、皆さんも似たようにあそこを狙っていたのだと感じました。

私は、19歳の時に劇団を作り、36～7年になります。こちらに引っ越してきてから8年くらいになります。19歳の時に稽古場を探していて、お金がなかったので、1日に7つくらいの仕事を徹底的に掛け持ちしていたため、特殊技能は取る暇もありませんでしたが、いろいろとやって劇団を維持してきました。そして稽古場がやっと持てたのが、仙台駅東口の力寿司やいたがきがある辺りの石の蔵でした。お客さんが70名も入ると満員で、酸欠になるような小さなところでした。自分たちの舞台といっても、box-1の1/4もないくらいの狭いところで、1週間の内6日間公演を続けて、1日はバンドのライブをやっていたので、時々倒れていましたが、それでもずっと楽しかったです。その後、私は仙台を出たことがないのですが、平田オリザくんたちから、東京に呼んでもらったのです。オリザくんのお父さんが持っていた「アゴラ劇場」も似たような感じの面白いところで、以来、少しずつ、仙台の外に出るようになったのです。最初の稽古場を作る際もお金がなくて、「欽ちゃんの仮装大賞」に参加して、賞金をもらったので、稽古場を借りました。たぶんI.Q150の一番有名な話しかもしれません。駅の裏でアクセスがとてもよく、そして毎日公演をやっていたら、いつの間にか列ができ、遠くからお客様もきてくれるようになりました。ですので、ずっと仙台（その劇場に）にいたのです。ただその後、状況が変わって、そのスタジオがなくなり、どこかへ行かなきゃいけなくなって、東仙台に稽古場を借りたのですが、地震で傾いてしまい、そこも出なきゃいけなくなり、10-BOXの八巻さんに卸町に引っ越したいと相談しました。卸町は、問屋街というイメージがありました。

10-BOXが出来た時に、前の工房長の熊谷さんとか仲間たちがなかなか面白いところと言っていて、何が面白いのだろうと思っていたら、ソーホー（ニューヨーク）みたいに、いろんな芸術家がたくさんくるはずだよと言っていました。やっぱりモノづくりをする会社がたくさんあつたりする場所なので、我々みたいなモノづくりをする人として、このような場所がやっぱり合うと思います。車がなかったら、来づらいイメージで、当初

10-BOXにお客さんがタクシーで来る際に、タクシーが10-BOXを知らないため、遅れてくるお客さんもたくさんいました。今は知られて普通に皆さんいらっしゃいますが、地下鉄も出来ましたしね。

私は、8年くらい御町にいましたので、「おろシネマ」とか見に行っていましたよ。ふれあい市にも行きました。ただ、その時にアートのフェスティバルをやっていることは、一般の私たちには分からなかったですね。もう少し宣伝があった方がいいのかなとも思いました。

澤野さんの様に子ども達にいっぱい会うということも素晴らしいことですし、これから先の事を考えていくと、私たちは老けていきますが、最近の子どもは、こけしみたいにポーっとしている子がいっぱいいるように思うので、もう少し楽しいことを教えてくれる大人たちがたくさんいればいいなと思います。そういうことをたくさんやっていくべきだと思う。私は最近、演劇とは違う農業などもやっているのですが、演劇、現代美術と決めず、いろんなものがあっていいと思うし、地下鉄が通ったので、何か出来ないかなと思っています。

若い時は、場所にこだわりがありましたが、私は今、外とか通路とかどこでもいいと思います。この前、うちで「ポエトリーフェス」というものを実施して、詩人の方々がたくさん来ましたが、倉庫って夏とても暑いのですよ。でも皆さん大喜びで帰って行かれました。

私たちが小さい時はこういった10-BOXみたいな施設がなかったので、劇場って子ども達がお金だして借りるには、あまりにも高いのでね。今の子どもたちは、こういった場所があってもいいですね。全部出来たものをあげるのではなくて、自分たちでやってみたらどうか出来るものの方が子ども達も喜ぶのではないのでしょうか。そんな風な施設のひとつとして、うちの稽古場もあればいいなと思います。うちの劇団、昔は劇団員がコンスタントに40人程度いたのですが、今は5人です。どうやって1か月20万弱の家賃を出しているかという、1人3万以上払って維持しています。何故そのようにするかという、「ここを誰かが使いたいと思うかもしれない」と思うからです。大きな団体なら別ですが、一人で踊っている子とか、少し恥ずかしいのでここでやらしてくださいという子がいるかもしれないと思っています。

私は10年くらい前まではずっと劇団の事しか考えていませんでした。毎日、芝居して働いての生活だったので、よその事を考えられなかったと思うのですが、今は少し変わりました。これからは、繋がっていくということに楽しみを見つけていきたいと思う。なので、稽古場の維持をしていきたいと思っています。

【八巻】

ありがとうございます。

今日、私が期待していたのは、出会いと多様性の確認。

皆さん、本当に価値観も違うし、描いているこれからのイメージも同じではないと思います。それでいいと思いますし、出会いのチャンスがあったら拾いながら前に進めれば、いろんな相乗効果が生まれてくるし、たぶん登壇者の皆さんの活動が若い人達の憧れになっていくのだらうと思いました。時間がきましたので、最後に、INTILAQの佐々木さんと竹川さんに今回のシンポジウムの感想など一言頂いて終わりにしたいと思います。

【佐々木氏】

僕たちは、皆さんに比べて、卸町が浅いので、皆さんが卸町に傾けている情熱を、卸町の歴史と共に感じる事ができた良い機会となりました。本当に、これはご縁だと思うので、このご縁を大切にしていきたいと思っております。

【竹川氏】

資料を拝見すると、場の創出や、場を拠点とした街づくりとか、箱モノではない箱や物と書いてあって、我々INTILAQで実現したいといていた事とは、まさにこういった事なのですよね。まず箱は出来ましたので、そこに人が入ってきて、心が入ってきて、それがまさに街づくりにつながっていくサイクルを長い時間かけて、一緒に作っていったらいいなと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

【八巻】

ありがとうございました。少し時間が押してしまいましたが、これで「卸町のこれまでとこれから」を終了したいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。